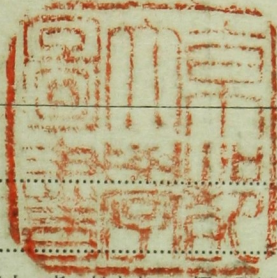


泌尿器科紀要

第 7 卷 第 11 号

昭和 36 年 11 月



随想 術技メモから.....小田完五.....947

尿路腫瘍とホルモン環境

 I 下垂体副腎皮質と尿路腫瘍.....石部知行.....949

腎動脈瘤について.....岸本 孝・松本恵一・樋口照男・遠藤 法・甲斐祥生.....962

水腎水尿管症における尿管運動のレ線キモグラフィによる研究

 殊に手術後の尿管運動の恢復について.....岡 直友・塚本俊雄.....973

副睾丸に原発した横紋筋肉腫の1例.....酒徳治三郎・本郷美弥・市田文弘・佐々木 博.....990

尿管憩室の1例.....友吉唯夫・久世益治・祖父江鮮・長谷泰夫.....994

テルベン製剤 Rowatinex による尿路結石症の治療

.....浅井 順・牧野昌彦・蔡 衍欽・三宅弘治... 1000

編集後記・購読要項・投稿内規..... 1010

Endocrinological Studies on the Patients with Urogenital Tumors.

I. Pituitary-adrenocortical System and Urogenital Tumors. T. Ishibe...949

Aneurysm of the Renal Artery : Case Report and Review of the

Literatures..... T. Kishimoto, K. Matsumoto, T. Higuchi, M. Endo

and Y. Kai...962

Roentgenographic Studies on the Movement of the Ureter in Hydronephrosis

and Hydroureter with Special Respect to its Post-operative Improvement.

..... N. Oka and T. Tsukamoto...973

Rhabdomyosarcoma of the Epididymis, Case Report.....J. Sakatoku,

H. Hongo, F. Ichida and H. Sasaki...990

Diverticulum of the Ureter, Case Report.....T. Tomoyoshi,

M. Kuze, K. Sofue and Y. Nagatani...994

Treatment of Urolithiasis with Rowatinex.....J. Asai, Y. Tsay, K. Miyake

and M. Makino...1000

京都大学医学部泌尿器科学教室

Department of Urology, Faculty of Medicine,

Kyoto University, Kyoto, Japan.

Editor : Prof. Tsutomu INADA

泌尿紀要

Acta Urol. Jap.

編集後記

泌尿器科の学会が、総会も地方会も、年々に盛大になつてゆくのは、頼もしいことだ。それにつけても思うのは、皮膚科との関係である。地方会に於ては、両科がまだ合同して行つていがあるが、それは主に開業医或は両科の分離していない病院の勤務医を対象に考へているようである。然し、それにしては近頃の学会の内容は高級であり、保険診療の事なども、あまり念頭がないから、開業医或はそれに類した医師にとつては、殆んど意味がない。開業上に直接参考になる学会にしようとするれば、レベルを下げねばならぬ。然し特殊な場合を除いて、そのような学会はない。つまり両科の学会を一緒に開く事は、現在及び将来に於て無意味であり、両科は診療科目としても、はつきり分離すべきである。両科を1人で、或は一機関で診療しているのは、両科とも程度が低いか、又はどちらかの科が、なおざりになつていると考えられる。

日赤医学 13巻 4号に正木 大森阿博士が「皮膚科と泌尿器科の分離について」と題する文章を掲げていられる。これは大阪赤十字病院の実状にして、同院は、まだ完全とは云えぬが、一応両科の分離診療を行つており、甲表採用にて、収入の面から見て、両科の分離が無理でない、と云う実績を示し、今後更に完全分離を行うならば、患者の幸福は増し、病院の信用、格式は向上し、収入も増加するであろうと述べられた。全くその通りであると思う。大病院にては両科の分離が必要であり、又経営上にも有利である事を、病院当事者は認識するべきである。

大学にては、学問的にも、大学院制度の上からも、又将来の専門医の問題からも、両科分離は必然であり、着々とその方向に進んでいるが、総合病院にては、なかなか分離がむずかしい。それには種々の理由はあるが、結局は昔からの古い考へが、病院当事者の頭の中にあるからである。両科は1人で診療出来るとか、分離すると経費が懸かるとかの考へである。然し両科を1人で忠実に診療するのは不可能な事、また両科を分離すれば、収入面からもプラスになる事は、上に記した如くである。分離すると開業がむずかしいと云う頑固な考へがあるが、それは良心的な診療を念頭に置かないものである。あまり、開業、開業と云うのはどうであろうか（昭和36年11月）

購読要項

1. 発行は毎月（年12回）とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円、払込みは振替口座番号京都4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名（フリガナ）、住所（雑誌郵送先）、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他、寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を付け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁 600円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集者が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。